OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	動物たちの"Unconscious Bias"：ディズニー映画『ズートピア』から
Author(s)	舞, さつき
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 45-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69891
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

動物たちの“Unconscious Bias”

――ディズニー映画『ズートピア』から――

舞　さつき

１．はじめに

“Unconsciousness Bias（無意識の偏見）”は、2000 年前後から着目されてきた概念であり、この概念を初めて提唱したのは、Daniel Kahneman である[1]。2014 年、グーグルは社員の性別と人種構成を発表し、社内で“Diversity（多様化）”が進まないのは、“Unconscious Bias”が理由の一つであるとし、“Unconsciousness Bias”の講義を社員教育として始めた[2]。同社で人間分析を行う Brian Welle はバイアスとは何かを、ライオンを見た瞬間にライオンと認識し、「逃げる」という行動をとることを例に挙げ説明する。このことなどから、生命を脅かす外敵に襲われる前に逃げる、動物の生存戦略として生じたものとも考えられることがある。

映画『ズートピア（*Zootopia*）』はリッチ・ムーアとバイロン・ハワード監督による 2016 年公開のディズニー映画で、ウォルトディズニーアニメーションスタジオの長編アニメーションとしては 55 作目にあたる。本作は世界的に大ヒットし、世界中で 10 億ドル以上の興行収入を稼いだだけでなく、アメリカの著名な映画賞におけるアニメ部門を席巻した[3]。『ズートピア』の世界では動物たちが二足歩行で歩き、服を着て（一部のナチュラリストを除き）、人間のように暮らしている。舞台は多種多様な動物たちが暮らす大都市「ズートピア」[4]で、主人公のウサギ・ジュディ・ホップスは、正義感が強く、努力家で、家族の反対を押し切って初のウサギ警官となり、相棒のキツネ、ニック・ワイルドと共に、肉食動物の行方不明事件を解決するというのが物語の筋である。

Beaudine、Osibodu、Beavers は、『ズートピア』の世界を“A world chock full of Stereotypes, Race, and Racism” (230) と表象している。登場人物たちが動物の姿を借りてはいるものの、

---

1 Kahhenman, Daniel. *Judgement Uncertainly: Heuristics and Biases*, Cambridge University Press. 1982.

2 https://youtu.be/nLjFTHTgEVU

3 2017 年第 44 回アニー賞にて作品賞、監督賞、キャラクターデザイン賞、絵コンテ賞、声優賞、脚本賞の 6 部門受賞。第 74 回ゴールデングローブ賞、第 89 回アカデミー賞でも長編アニメ映画賞を受賞した。

4 映画自体を指すときは『ズートピア』、大都市としての場所を指すときは「ズートピア」とする。

『ズートピア』には現代アメリカ社会のステレオタイプ、人種、人種差別が描かれている。本稿は、それらの点に着目しながら、主人公ジュディの持つ“Unconsciousness bias”について考察していく。

２．『ズートピア』に潜む人間社会の Racism

「Zoo（動物園）」と「Utopia（理想郷）」の組み合わせである「ズートピア」とは、多種多様な動物たちが暮らす文明化された大都市のことを指している。しかし、実際の「ズートピア」はジュディが思い浮かべていたような、肉食動物と草食動物が仲良く暮らす「楽園」とは程遠い場所であった。Beaudine、Osibodu、Beavers は、ディズニー映画における肉食動物と草食動物の二分は“an allegory for the black and white racial dichotomy found within many Western societies” (231) と見なすことができると主張しているが、『ズートピア』も例に漏れず、何気ない台詞や何気ない行動に、現代アメリカ社会のアフリカ系アメリカ人に対する Racism が現れている。また、Soares は、『ズートピア』におけるいくつかのキャラクターの“linguistic stereotype”について指摘している。Soares によると、ジュディの故郷である田舎のキツネや羊は Southern American English の特徴がある話し方であり、海賊版 DVD を売りさばく、泥棒イタチは、African American Vernacular English で話している。しかし、日本語字幕や吹替では、方言や話し方などによる日本語の違いは見られなかったため、本章では、字数などの制限がかかる日本語の字幕や吹替翻訳では見落としてしまう可能性がある場面に着目し、『ズートピア』での人間社会の Racism のメタファーについて見て行きたい。

図１は、副市長であるヒツジの頭をニックがこっそり触っていることに気づいたジュディが驚愕の表情で、“You can’t just touch a sheep’s wool!”とニックを嗜めるが、ニックは“It’s like cotton candy”と言い触り続ける場面である。ここでのジュディの台詞は、日本語字幕では「大事な羊毛よ」と訳されているが、なぜ羊毛（sheep’s wool）に触ってはいけないかは明言されていない。

図 1 [01:01:28]

2018 年、アメリカで *Can I Touch Your Hair?: Poems of Race, Mistakes, and Friendship* が出版された。この本では、5 年生の白人とアフリカ系アメリカ人の子供が授業の一環である“Poetry Project”でペアを組み、靴、髪の毛、学校、教会などといったテーマで書き合った詩を通して、人種や人種差別、アイデンティティなどの問題が描かれている。以下は「髪の毛」というテーマに対しアフリカ系アメリカ人の子供 Charles が書いた詩である。

On a random Tuesday, on the bus,
Dennis told me, “Can I touch your hair?” He pats it
before I can respond. “It feels like a sponge,” he says.
My fists clench, and my face gets hot. “You need to learn to wait
for an answer after asking permission,” I tell him and pat his hair, *hard.*
“Oh, how about that? Your hair feels like mop.” I say.
I keep my fists ready, but he turns away.

（p.9）

この詩に表れているように、アフリカ系アメリカ人の Charles にとって、許可無く髪の毛に触ることは、拳を握り締め、顔が火照るほど腹立たしくなることである。ジュディの台詞 “You can’t just touch a sheep’s wool!” という発言は、このようなアメリカ社会におけるタブーを踏まえており、アフロのメタファーとしてヒツジの縮毛が用いられていることがわかる。また、主人公ジュディが初めてズートピア警察署に出勤した際に、受付担当のチーターに「君、思ってたよりずっとカワイイな」と言われたことに対するジュディ返答にも上記のようなアメリカ社会のタブーが含まれている。

Scene [00:13:54-00:14:00]
Dialogue: You probably didn’t know, but a bunny can call another bunny “cute” …
but when other animals do it… it’s a little…
Subtitle: ウサギ同士なら“カワイイ”も怒らないけど―／ほかの動物に言われると…
Dubbing: うーんちょっとそれはどうだろう あのね ウサギは小さくてかわいいけどだからって見た目で判断されるのはあまりその…

日本語吹替えの訳を見ると、ジュディは見た目だけを見て「カワイイ」と言われたことに対して戸惑っている様子であるが、原文／字幕の方を見るとこのやりとりはもう少し複雑である。ハッチントンは、自らの息子が友達に「よぉ、ニガー、なにか用か」と言っているのを聞き、何故そういう言葉を使っているのか尋ねたところ、息子はみんなが使っているから、と答えたが、その後にじゃあ白人の友達がお前を「ニガー」と呼んでもいいのか、と質問すると、息子は黙り込んだ、という自身のエピソードを語り、次のように述べている。

最近黒人と同じようにこの言葉を無頓着に使う若者が増えてきたのだ。
　少し前のことだが、僕のともだちがそういう場面に遭遇した。エレベーターの中でのことだ。彼の他に白人の若者が二人乗っていた。突然一人がからかい半分に相棒を「ニガー」と呼んだのだ。［…］これは人種差別だろうか？感性の欠如なのだろうか？それとも、ま

> ったくの無知に起因する言動なのだろうか？黒人がその言葉を差別用語だと思っていることを知らなかったのだろうか？（90）

ジュディのいう台詞は “bunny” をアフリカ系アメリカ人、“other animals” を白人やアフリカ系以外の人間、“cute” は「ニガー」や「ニグロ」だと置き換えることができる。そうすると、吹替の訳はこの会話の本質を捉えられていないと言えるだろう。上記のように、ヒツジやウサギなどの草食動物に、アフリカ系アメリカ人の人種的メタファーが表れているが、『ズートピア』における草食動物＝被支配者／マイノリティの立場である、と結論付けるのはまだ早い。

２．肉食動物（predator）と草食動物（prey）

図２[01:28:47]

何千年もの昔は、『ズートピア』の世界が「凶暴な肉食動物（vicious predator）」と「か弱い草食動物（meek prey）」の２つに分かれていたことが映画冒頭の学校劇で語られる。進化と共に原始的で野蛮なやり方を乗り越え（But over time we evolved, and moved beyond our primitive, savage ways [00:01:53-00:01:58]）、初めて肉食動物と草食動物の共存関係が成立した都市こそが大都市「ズートピア」である。観客は、冒頭から草食動物は「か弱い」という印象を与えられ、前章で見たようなアフリカ系アメリカ人のメタファーと相まって、草食動物は「ズートピア」の被支配者であり、社会的弱者であると考えるかもしれない。しかし、物語後半で実は大都市「ズートピア」の 90％は草食動物が占めており、肉食動物は 10％に過ぎず、「か弱い」存在の草食動物が圧倒的なマジョリティであり、肉食動物がマイノリティであることがわかる。Beaudine、Osibodu、Beavers は、これに対し “These numbers are similar to the demographic numbers for black men and women within the United States——12.6 percent according to the 2010 national census” (228)と指摘している。

さらに、誘拐事件の決定的な証拠をつかんだジュディとニックが、その証拠を警察署に届けるために、閉館中の自然史博物館（Natural History Museum）を通るのだが、ここには『ズートピア』の物語には登場せず、語られていない、動物たちの世界の成り立ちが描かれている。図２には四つ足の肉食獣が木の上にいて、その下に小さく、槍のようなものを持つ草食動物たちがおり、肉食動物を追い詰めているのが見て取れる。これらのことから、

実は肉食動物たちこそが被支配者であり、歴史上は草食動物たちが大都市「ズートピア」が作られていくうえでの支配者であったことがわかる。冒頭で観客に与えられた「凶暴な肉食動物（vicious predator）」と「か弱い草食動物（meek prey）」という構図は、歪められた歴史的事実であったのだ。図３を見ると、ウサギの先祖にはツノのようなものが生え、口元には鋭く立派なキバがあり、手には武器を持ち、とても「か弱い草食動物（meek prey）」とは言い難い姿である。

図３[01:30:05]

相棒ニックと力を合わせ、行方不明の 14 名の肉食動物全員を発見したジュディは、記者会見で事件について話をすることになる。行方不明であった肉食動物たち全員が凶暴化していたことについて、ジュディは、凶暴化の理由は生物学的であり、DNA に基づくものだという発言をする。そして、以下のように続ける。

> […] thousands of years ago, uh predators survived through their a ——aggressive hunting instincts. For whatever reason, they seem to be reverting back to their primitive, savage ways. [01:11:25-01:11:40]

このジュディの発言に対し、肉食動物であるニックは怒りを露わにし、非難する。ジュディはそれに対して “I just stated the facts of the case. I mean, it’s not like a bunny could go savage” [01:12:28-01:12:32] と答えるのだが、この自然史博物館の銅像を見る限りウサギも “could go savage” であるし、むしろ武器を手にしている草食動物は、肉食動物よりも「凶暴(vicious)」であろう。

３．主人公ジュディの“Unconscious Bias”

ジュディは物語序盤に故郷の田舎「バニーバロウ」を離れる際、都会の肉食動物に気をつけろ、特にキツネは最悪だという両親の肉食動物に対する偏見に対し、うんざりした表情を見せ、 “Gideon Grey was a jerk who happened to be a fox. I know plenty of bunnies who are jerks” [0:08:56-0:09:01]と言う。しかし両親の過剰な心配から、断り切れずキツネよけスプレーだけを手にし、「ズートピア」へと向かう。一見この場面やこの台詞からは、ジュディは偏見を持たない、正義感の強いキャラクターに思える。しかし、ジュディは初めてキツネのニックを見かけたとき、ゾウの店員とニックがもめているのを見てすぐさま、キツネよけスプレーに手を伸ばそうとするのだ。

“Unconscious Bias”とは、誰もが潜在的に持っている“Bias（偏見）”のことであり、育つ環境や所属する集団の中で知らず知らずの間に脳にきざみこまれ、既成観念、固定観念となっていく。対象は男女、人種、貧富などさまざまであるが、自覚できないために自生も難しいものである[5]。無意識にキツネよけスプレーに手を伸ばすジュディの姿は、自身にも知らず知らずのうちに、両親と同じようにキツネに対する“Unconsciousness Bias”が刻みこまれていることを示唆している。しかし、ニックに非がないことがわかると手を離し、“Oh. I’m such a …”[00:19:13] と自分の行動を反省する。そして店員から不当な態度を受けるニックを助け、ニックに“It’s just —— You know, it burns me up to see folks with such a backward attitudes toward fixes” [00:20:57-00:21:02] と伝える。

その後、ニックと行動を共にすることとなったジュディには、キツネを含む肉食動物に対する偏見はなくなったかのように一見思われる。しかし、前章で述べたように、ジュディは記者会見で肉食動物の凶暴化の理由を「生物学的であり、DNA に刻まれたものである」と失言する。テレビのニュース番組でこのことが報道され、草食動物たちによる肉食動物への偏見は顕著なものとなる。国際的な歌手であり、「ズートピア」の象徴でもあるガゼルが開いた平和集会ではデモが起こり、デモ参加者であるブタは“Go back to the forest, predator” ![01:14:01-01:14:03] と叫び、電車で隣にトラが座ると、ウサギの親子はそれを怖がる。この様な状況に陥った「ズートピア」を見て、ガゼルは以下の様な声明を出す。

> Zootopia is a unique place. It’s a crazy, beautiful diverse city… where we celebrate our differences. This is not Zootopia that I know. The Zootopia I know is better than this. We don’t just blindly assign blame. [01:14:05-01:14:22]

ガゼルは「ズートピア」を“crazy, beautiful diverse city”と表象しているが、この後に続く「みんなの違いを賞賛する」という言葉から、“diverse city”は“Diversity”であるともとれるだろう。“Unconscious Bias”は、“Diversity”を妨げるものだと言われているが、まさにここではジュディが発した“For whatever reason, they seem to be reverting back their primitive, savage ways” [01:11:25-01:11:40] という“Unconscious Bias”からくる言葉が、メディアから「ズートピア」中に広まり、ガゼルの言う“diverse city”を脅かしているのだ。

しかしジュディは、肉食動物の凶暴化は、決して生物学や DNA によるものではなく、誰かが肉食動物を狙って、意図的に凶暴化させていることに気づくと同時に、自らの過ち、自らの“Unconscious Bias”に気づき、ニックに対し“I was ignorant, and irresponsible, and small-minded. But predators shouldn’t suffer because of my mistakes. I have to fix this” [01:20:30-01:20:49] と伝える。Chacra が指摘しているように：

---

[5]「無意識のバイアス - Unconscious Bias - を知っていますか?」男女共同参画学協会連絡会(2017)、http://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2017/UnconsciousBias_leaflet.pdf

> For that to happen, we first need to become aware of our own biases, which means recognizing the lenses that we've looked through for our entire lives.

“Unconscious Bias” は、無くそうとするのではなく、自覚することが重要である。ジュディはここで自らの “Unconscious Bias” を自覚することができた。さらに、ジュディはズートピア警察学校の卒業式で、スピーチを任され、以下のように述べる：

> Real life is messy. We all have limitations. We all make mistakes.
> Which means —— hey, glass half-full —— we all have in common. And the more we try to understand one another, the more exceptional each of us will be. But we have to try. […] Try to make the world a better place. Look inside yourself and recognize that change starts with you. It starts with me. It starts with all of us. [01:33:45-01:34:38]

“Unconscious Bias” とは、動物の生存戦略として、危機的な状況を無意識のうちに感知・判断するための能力とも捉えることができるため、全てを取り除くのは難しい。しかし、自覚することによってその弊害を防ぐことができる。ジュディは最後のスピーチで、誰もが間違いを犯すことはあるが、自分と相手の共通点を見つけ、互いを理解しようと努力すれば、一人一人がより特別な存在になってゆく、ということを警察学校の卒業生たちに向けて伝える。これは “Diversity” を妨げる “Unconscious Bias” を乗り越えるためのジュディなりの答えであろう。こうすることによって、「ズートピア」はガゼルの言うような「真のズートピアの姿」（“It's a crazy, beautiful diverse city… where we celebrate our differences.”）を取り戻すのだ。『ズートピア』は、動物たちが抱いているような「肉食動物は凶暴」や「草食動物はか弱い」などと言った “Unconscious Bias” を、冒頭の学校劇や、Racism のメタファーを用いて観客にも抱かせるが、物語の最後には、肉食動物は被支配者であり、肉食動物の凶暴化も、実は草食動物側の企んだ「草食動物たちが肉食動物におびえることによって自身は権力の座に居座り続ける」という計画であったことが明らかになる。“Unconscious Bias” の間違い、そしてその間違いを自覚することの重要さを、『ズートピア』は主人公ジュディを通して伝えている。

参考文献

Beaudine, G., Osibodu, O., Beavers, A. “A. Disney's Metaphorical Exploration of Racism and Stereotypes: A Review of Zootopia.” *Comparative Education Review,* vol.61, no.1, 2017. pp. 227-234.

Chachra, Debbie. ‘To reduce biases, acknowledge them,’ *Nature* vol.548, no.373, Nature News, 2017.

http://www.nature.com/news/to-reduce-gender-biases-acknowledge-them-1.22502?sf108544349=1

Francis, Suzanne. *Zootopia: The Official Handbook (Disney Zootopia)*. RH/Disney, 2016.

Julius, Jessica. *The Art of Zootopia.* Chronicle Books, 2016.

Latham, Irena., Waters, Charles. *Can I Touch Your Hair?: Poems of Race, Mistakes, and Friendship*, Carolrhoda Books, 2018.

Soares, Telma O.. “Animated Films and Linguistic Stereotypes: A Critical Discourse Analysis of Accent Use in Disney Animated Films.” *BSU Master’s Theses and Projects.* Item vol.53, 2017. http://vc.bridgew.edu/theses/53

佐藤唯行『映画で学ぶエスニック・アメリカ』, ＮＴＴ出版株式会社, 2008 年.

高橋基治『英語シナリオで楽しむ［ズートピア］』, 学研プラス, 2016 年.

ハッチンソン, アール, オファリ『ゆがんだ黒人イメージとアメリカ社会――ブラック・メイル・イメージの形成と展開』, 脇浜義明訳, 明石書店, 1988 年.

ハワード, バイロン.，ムーア, リッチ（監督）ブッシュ, ジャレド.，ジョンストン, フィル（脚本）／『ズートピア』［DVD］，日本：ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン.